

甘肅省臨夏方言の連読変調について<sup>1</sup>

更科 慎一

〇、はじめに

甘肅省の南西部にある臨夏回族自治州は、回族、漢民族のほか、東郷族、保安族、撒拉族、土族、チベット族などが居住する多民族・多言語の地域である。この地に話される漢語は「河州話」と呼ばれる官話系の一方言である。河州話は、入声が「平声」に派入する点で、甘肅省の首府蘭州の方言(全濁入声陽平に、他は去声それぞれ派入)などとは系統が異なっている<sup>2</sup>。

多民族地域の言語であることを反映して、河州話は、漢語としては異常な、文化的に上位のあるいは隣接して話される他の言語の影響で生じたと考えたくなるいくつかの特徴を有しており、言語接触の問題を考える上でたいへんに興味深い方言である。その中には、臨夏市の回族的漢語の“二”の字音[ɣw]に非音素的ながら咽頭摩擦音[ɣ]が現れるという報告<sup>3</sup> (Charles N. Li (1984))に見られるような音声面の特異性もあるが、この地の方言の特異性は何と言っても統語論にある。即ち、他の現代漢語方言や歴史上の漢語の諸変種とは異なって[賓語+動詞]の語順が普通であることや、“哈”等の後置詞が発達していることなどの特徴である。こうした特徴は臨夏方言だけでなく、省都西寧を含む青海省の方言についても指摘され、中国では1980年代初めから報告が出されている(例えば、程祥徽(1980)、马树钧(1982)など)。

河州話の語法上の特殊性を示すために、筆者が2006年3月に収集し得た循化撒拉族自治县の方言の短文をいくつか挙げてみよう。インフォーマントは循化县積石鎮瓦匠庄村出身の回族的青年(男、当時青海師範大学の学生)である。<sup>4</sup>

他来的哈我不知道。(1)

tʰa<sup>44</sup> lei<sup>21</sup>-ti<sup>44</sup>-xa<sup>21</sup>            ɲə<sup>44</sup> pu<sup>22</sup>-tɕ<sup>ʔ</sup><sup>21</sup>-tə<sup>44</sup>.

彼 来る-(構造助)-[哈] 私 ない 知る

<sup>1</sup> 本論文は、平成22年度科学研究費若手研究(B)「地理情報システムを用いた中国の諸言語に関する言語類型地理論的研究」の成果の一部である。

<sup>2</sup> 河州話の分布地域は、甘肅省では臨夏回族自治州の臨夏市、臨夏県(以下、“県”を省略)、永靖(一部)、東郷、積石山、広河、和政、及び甘南州の合作市、夏河、碌曲、瑪曲、卓尼、迭部(党志才等(2006))であり、青海省では循化、同仁、貴徳、尖扎、黄河沿岸の循化に隣接した地方(张成材(1984))である。

<sup>3</sup> 咽頭摩擦音はアラビア語の[h][ɣ]が有名であるが、漢語方言にはまれである。Charles N. Liの報告している[ɣ]はアラビア語との接触によるものである可能性がある。ただ咽頭摩擦音は、臨夏州に話される東郷語、保安語などのモンゴル系言語、青海省のアムドチベット語、「五屯話」等にも報告されており(このことについて、詳しくは更科(2007), 30頁を参照)、地域特徴の一つと言えるかもしれない。因みに、本稿での報告の元になっている臨夏市街地での筆者の調査(2010年)では、“二耳儿”などの字音は[ɣw]であり、咽頭摩擦音は確認されなかった。

<sup>4</sup> 以下の例文の音声表記は簡略表記である。Nは鼻音韻尾を表し、実際の発音は[n], [ŋ], 直前の母音の鼻音化などである。循化方言の韻母体系では、鼻音韻尾に口腔内調音の対立はない。

「彼が来ることを私は知らない。」

我已经饭吃过了。(2)

ŋə<sup>44</sup> i<sup>44</sup> tɕiN<sup>44</sup> fɛN<sup>53</sup> tɕ<sup>h</sup>l̥<sup>(21)</sup>-kuə<sup>44</sup>-liɔ<sup>21</sup>.

私 すでに ご飯 食べ-(経験)-(完成終止)

「私はすでにご飯を食べた。」

晚上到塔啦我事情哈做完给。(3)

wɛN<sup>44</sup> ʂɔN<sup>44</sup> tɔ<sup>44</sup>-ta<sup>21</sup>la<sup>21</sup>                      ŋə<sup>44</sup> ʂ<sup>l̥</sup>(<sup>44</sup>) tɕhiN<sup>44</sup>-xa<sup>21</sup> ts<sup>u</sup><sup>44</sup> wɛN<sup>21</sup>-kei<sup>44</sup>.

夜                      到る-(限界副動詞) 私 事                      -[哈] する 終わる-[給]

「私は夜までにこの仕事をやり終える。」

例文(1)では“知道”の賓語“他来的”「彼が来るの」が動詞に先立ち、かつ賓語標識“哈”を伴っている。例文(2)では、“吃”の賓語“飯”が動詞に先立ち、副詞“已经”が賓語よりも前に来ている(普通話と同様、動詞の直前に置くこともできる)。例文(3)では[賓語+動詞]フレーズ、後置詞“哈”のほか、“到塔啦”「到るまでに」に用いられている接辞“塔啦”が注目される。ほぼ同音で同じ意味の副助詞が、モンゴル語(-tala)や満洲語(-tala)にも見られるからである。

臨夏は、中国西北一帯に広く行なわれている民謡「花儿」の中心地の一つと見なされている。花儿は漢語で歌われるが、多くの民族によって共有されている点が大きな特徴である。《青海花儿大典》(2010年、主编吉狄马加, 执行主编赵宗福, 青海人民出版社)という本に、青海省の著名な花儿歌手39名(生年は1922年から1985年)が紹介されているが、その出身民族を見ると漢族、回族、撒拉族、チベット族、土族、東郷族など多彩である。花儿という一つの言語芸術が多くの民族に共有されていることから考えて、それを支える臨夏、青海の方言が様々なタイプの異言語からの影響を受けているとしても何ら不思議はない。

この地方には、書面言語についても特筆すべき文化がある。臨夏は、回族や東郷族などのムスリムが使用するアラビア文字表記漢語文「小経」(消経、晓経、小児錦などとも)による出版活動の一つの中心地である<sup>5</sup>。市街地に数軒あるイスラム関係書籍の専門店(経書店)には、小経で書かれた書物が現在も盛んに売られており、日付の確認できる最も新しいもので2008年に臨夏州広河県で出版された宗教書が売られているのを筆者は見た。小経が反映する言語は純粋な方言というよりは、モスクやイスラム学校での宗教教育に用いられる「経堂語」と呼ばれる独特のスタイルの漢語であるが、そのアラビア文字綴りなどに、小経が書かれた地の方言の特徴を見ることができ。小経の書の中には漢文と対訳のものもあるが、小経のみ、あるいはアラビア語と小経の対訳の書も少なくない。現代まで使われている非漢字系の漢語文として、この表記体系はもっと注目されてよいものであろう。

筆者は2010年8月の五日間、臨夏市内に滞在し、市街地にあつて回族が多く住む八坊地区のある金物店で、回族の少年(1990年生まれ)に二音節語等を発音してもらった。以下は

<sup>5</sup> 「小経」の表記システム、臨夏を含めた中国各地における「小経」の使用実態、「小経」の書籍の出版と流通の実態等については、町田和彦等(2003)を参照。

その報告である。

### 一、単字調

河州話の単字調は平声、上声、去声の三つである。平声は中古漢語の平声と入声に由来する。上声は中古漢語の清および次濁の上声に、去声は中古漢語の全濁上声及び去声にそれぞれ由来すると考えられているが、陈其光(1999)によると、循化では通時的には去声が期待される字の一部が上声を取るといい、去声字の中にも去声～上声両読の字があるという。更に積石山では、中古漢語の去声字の多くが上声に合流し、去声の調類を保つ字はすでに少数であると言う。即ち、単字調が二声体系に近づく趨勢が見られる。

中古の入声字について、兰州大学中文系(1996)は、一般的に言われているのとは異なり、次濁入声は「第二声」(つまり上声)に帰し、残りは第一声(つまり平声)に帰すとしている。ところが、同書所載の同音字表を見ると、次濁入声字は大半が去声に入っており、清入声字の中にも去声をもつ字が少なくない<sup>6</sup>。他の方言(蘭州など)の影響を受けている可能性があるが、同書の同音字表の記述は、臨夏方言の成立について新しい問題を提起せざるを得ない。因みに、2006年に筆者が調査した循化県の漢語では、中古入声字は平声に入るものが最も多く、次いで去声、上声の順であったが、派入の条件は不明であり、派入先の調類と声母の清濁の別との間に規律性は認められない。

様々な先行研究に記述された臨夏市、積石山県、循化県などの調類と調値は、次のようである。

马树钧(1982)：平声 13；上声 44；去声 53 (臨夏方言・回族)

Charles N. Li(1984)：平声 24；上声 44；去声 42 (臨夏方言・回族)

兰州大学中文系等(1996)：平声 243；上声 43；去声 42 (臨夏市)

陈其光(1999)<sup>①</sup>：平声 34；上声 44；去声 42(積石山県・保安族)

陈其光(1999)<sup>②</sup>：平声 23；上声 42；去声 44(循化県・撒拉族)

党志才等(2006)によると、臨夏回族自治区各地の調類と調値は次の通りである。

	平声	上声	去声
臨夏市	132	554	43
臨夏県	132	554	43
和政県	132	554	53
永靖県	13		53
広河県	13	53	44

永靖県は二声体系である点が他と異なる。広河県は上声と去声の調値が臨夏市などとは逆で、陈其光(1999)<sup>②</sup>の循化県に近い。

また、筆者が 2006 年に調査した循化県の調類と調値は、平声 23；上声 44；去声 42 であった。

<sup>6</sup> 次濁入声は「第二声」に帰すとする同書の記述には、誤植があるのかもしれない。

以上を総合すると、河州話の単字調体系は次のようにまとめられる：

平声＝低昇り調 上声＝高平調 去声＝高降り調

但し、上声と去声の調値が入れ替わる地点がある。

以下、河州話の調類に言及するときは、中古調類と紛れないように、平声を「第Ⅰ声」、上声を「第Ⅱ声」、去声を「第Ⅲ声」と呼ぶことにする。

今回は調査期間が短く、字音調査を行っていないが、動詞・形容詞を中心に、数十の単音節語を単独で発音してもらったところ、中古の平声字は 23 調、同じく上声字(全濁上声字は除く)は 44 調、同じく去声字(全濁上声字を含む)は 42 調であった。中古の入声字は、多くは平声と同じ 23 調であり、少数が去声と同じ 42 調であった。以上の状況は、先行研究におおむね符合する。

インフォーマントの単字調はあまり安定しておらず、特に 42 調と 44 調の区別は必ずしも明瞭でない<sup>7</sup>。インフォーマントに“买”：“卖”、“九”：“旧”のように上声の字と去声の字を対照させて発音してもらうと、どちらも 42 調に発音するが多かった。筆者は調査中、発話末位において声調とは無関係に下降調が現れる傾向<sup>8</sup>に気づいている。おそらくは文末の下降調のために 44 調と 42 調の区別が顕現しづらくなっているとみられる。兰州大学中文系等(1996)及び党志才等(2006)の記述(臨夏市などの)が示す声調調値が全て下降調であるのも、同様の下降調の反映かもしれない。

## 二、二字句の音調形

調査では、事前に用意した二字句のリストをインフォーマントに示し、読んでもらう傍ら音声表記した後で、インフォーマントにリストをもう一度読んでもらい、その録音を取った。このリストは、清平声、濁平声、上声、去声、入声の五つの歴史的調類から二つを取った 25 通りの調類の組み合わせごとに 12~18 個ずつ選んだ常用語(あるいはフレーズ)437 個と、接尾辞「-子」のついた二音節語 45 個、「-天」「-年」「-月」などを含む二字句 44 個を含む。但し、インフォーマントから、その語が臨夏方言には存在しない旨の指摘を受け、発音されなかったり、同義の別の語に取り替えられたりした語が数語ある。

### 2.1. 上声及び去声を含まない組み合わせ

すなわち、単字調類が第Ⅰ声であるもの同士の組み合わせであり、清平-清平、清平-濁平、清平-入声、濁平-清平、濁平-濁平、濁平-入声、入声-清平、入声-濁平、入声-入声の九種の組み合わせを含む。これらは様々な音調形を取るもので、以下、その一つ一つについてみて

<sup>7</sup> 陈其光(1999)も循化と積石山の河州話について、単字調のピッチの高低差が小さいことを述べ、「难怪操河州话的人自己也说：“河州话中单个的字单读时，……声调特征变得十分模糊，甚至完全消失。”」と報告している(陈其光(1999)、254 頁)。

<sup>8</sup> 発話末位で下降調や 21 調が現れる時には、同時に文節音にも興味深い特徴が見られる。即ち、口腔内調音が緩み、[a]ないしは[e]へとわたっていくような発音が聞かれるのである。例えば“金鱼”[tɕiN23 y:ə243]、“山水”[ʂaN23 ʂwi:ə21]、“根本”[kəm23 pəʔə21]など。最後の“本”[pəʔə]は、日本語の母語話者である筆者の耳には「ブンア」のように聞こえるが、韻律的には一音節である。

いく。

2.1.1. 23-23。九つの組み合わせ全てに分布する。単字調値がそのまま実現されたものとみることができる。動賓フレーズ<sup>9</sup>がこの組み合わせを取るほか、動賓構造以外の二音節動詞や、一般の名詞にも見られる。例：

通知(清平-清平)、帮忙(清平-濁平)、开学(清平-入声)、骑车(濁平-清平)、茶壺(濁平-濁平)、  
防毒(濁平-入声)、立冬(入声-清平)、白糖(入声-濁平)、出发(入声-入声)

2.1.2. 23-21。九つの組み合わせ全てに分布する。聴覚印象的には、第一音節に強勢がある。  
例：

飞机(清平-清平)、工人(清平-濁平)、山脚(清平-入声)、平安(濁平-清平)、琵琶(濁平-濁平)、  
农业(濁平-入声)、石灰(入声-清平)、越南(入声-濁平)、目的(入声-入声)

2.1.3. 21-34。清平-濁平、濁平-清平、濁平-濁平、入声-濁平、清平-入声、濁平-入声の組み合わせに分布する。聴覚印象的には、第二音節に強勢がある。例：

聪明(清平-濁平)、黄瓜(濁平-清平)、裁缝(濁平-濁平)、白杨(入声-濁平)、中学(清平-入声)、  
牛肉(濁平-入声)

21-34 形は第二音節が濁平のものに多く見られる一方、第二音節が清平のものにはほとんど見られない。臨夏方言にかつて陰平調と陽平調の別があったことを示すものかもしれない。

2.1.4. その他。

44-42。中间(清平-清平)

44-21。蜻蜓(清平-濁平)、英雄(清平-濁平)、音乐(清平-入声)

23-42。牙膏(濁平-清平)

2.2. [平声または入声]+[上声または去声]の組み合わせ

清平-上声、清平-去声、濁平-上声、濁平-去声、入声-上声、入声-去声の六種の組み合わせを含む。

2.2.1. 23-42。臨夏の調類が第Ⅰ声+第Ⅱ声であるもの、即ち清平-上声、濁平-上声、入声-上声の各組み合わせに見られる。動賓構造はこの型をとる。組み合わせごとに三つずつ例を挙げる：

清平-上声：青海 商场 浇水

濁平-上声：茶馆 芒种 淘米

入声-上声：拔草 黑纸 历史

---

<sup>9</sup> すでに述べたように、河州話は[賓語-動詞]の統語構造をもつが、語彙のレベルでは動賓構造を有する。循化方言の例文(筆者が2006年3月に収集)を二つ示す(動賓構造“看书”“打招呼”が用いられている)：他躺着看书者哩。「彼は寝転がって読書している」他笑着打招呼者哩。「彼は微笑んであいさつしている」

2.2.2. 23-21。前掲 2.1.2 に同じ調型で、やはり第一音節に強勢が感じられる。分布は 2.2.1 と同様、第 I 声+第 II 声である組み合わせに見られる<sup>10</sup>。例：

清平-上声：根本 经理 身体  
濁平-上声：传染 俘虏 民主  
入声-上声：筏子 谷雨 木耳

2.2.3. 21-42。第 I 声+第 III 声であるもの、即ち清平-去声、濁平-去声、入声-去声の各組み合わせについて、リストされたほぼ全ての二字句がこの調型をとる。組み合わせごとに三つずつ例を挙げる：

清平-去声：车票 关系 耽误  
濁平-去声：材料 楼上 难办  
入声-去声：白菜 革命 立夏

### 2.3. 第一音節に上声または去声を含む組み合わせ

上声-清平、上声-濁平、上声-上声、上声-去声、上声-入声、去声-清平、去声-濁平、去声-上声、去声-去声、去声-入声の 10 の組み合わせを含む。

2.3.1. 44-23。第二音節が第 I 声であるもの、即ち上声-清平、上声-濁平、上声-入声、去声-清平、去声-濁平、去声-入声の各組み合わせに見られる。動賓構造はこの型をとる。例：

上声-清平：雨衣 水车 洗衣  
上声-濁平：草原 奶牛 买鞋  
上声-入声：小学 两百 洗脚  
去声-清平：大葱 放心 电灯  
去声-濁平：大寒 布鞋 骂人  
去声-入声：厚薄 过节 大雪

2.3.2. 44-42。第一音節が第 II 声である組み合わせ、即ち上声-清平、上声-濁平、上声-上声、上声-去声、上声-入声の組み合わせに見えるほか、III+II(去声+上声)のリストされた二字句のほぼ全て、III+III(去声+去声)のリストされた二字句の大多数がこの調型をとる。

上声-清平：牡丹 眼睛 每天  
上声-濁平：枕头(一例のみ)  
上声-上声：胆子 手表 洗脸  
上声-去声：保护 老汉 炒菜  
上声-入声：喜鹊 体育 请客  
去声-上声：办理 救火 部长  
去声-去声：报案 命令 上课

このうち [上声-清平]、[上声-濁平]、[上声-入声]の組み合わせ(現代調類は II+I)は、44-42

<sup>10</sup> このほか例外的に、第二音節が去声である“立夏”がこの調型をとる。

型を取る例が少なく、大部分が 2.3.1 で扱った 44-23 型をとる。一方、[上声-上声]と[上声-去声]の組み合わせでは、44-42 をとる例が多く、特に後者はリストされたほぼ全ての二字句が 44-42 型である。

2.3.3. 44-21。第一音節が第Ⅲ声である組み合わせ、即ち去声-清平、去声-濁平、去声-上声、去声-去声、上声-入声の組み合わせに見える。第一音節に強勢が感じられる。

去声-清平：背心 大夫 桂花  
 去声-濁平：大红 少年 问题  
 去声-上声：道理 豆腐 右手  
 去声-去声：豆浆 笑话 大豆  
 去声-入声：办法 二十 快乐

2.3.4. その他。

23-42。第Ⅱ声+第Ⅱ声の組み合わせに数例が見える。例：

表演 打水 水桶

23-21。同じく第Ⅱ声+第Ⅱ声の組み合わせに数例が見える。例：

水果 雨水 老虎

以上の二つの調形は[I+Ⅱ]の二字句にも見られる(2.2.1, 2.2.2 を参照)ことから、官話系諸方言に広く見られる[上声+上声]→[陽平+上声]の変調の反映と思われる。

## 2.4. 二字句の連続変調体系

臨夏方言は単字調類がかなり単純であるにもかかわらず、二字句の音調形は上述 2.1 から 2.3 に見たとおり相当複雑であり、全く同じ調類の組み合わせからなっているにもかかわらず、語(句)によって音調型が異なっている状況が少なくない。例えば、同じく清平声+濁平声の組み合わせでありながら、“帮忙”は 23-23、“聪明”は 21-34、“工人”は 23-21 の音調型を取る。このことは、連続変調の方式に複数があることを示唆している。

臨夏方言の二字句の音調型は、二つの字が同じくらいの強さで読まれ単字調の調値を比較的よく保持しているタイプと、前字か後字のどちらか一方に強勢があるように聞こえ、強勢のないほうの音節の調値が単字のそれから大きく変形させられたり、調類の区別が中和させられたりしているタイプの二類に分けられるように思える。前者を A 型、後者を B 型と呼んで整理してみると下の表のようである。

### A 型変調

前字 \ 後字	I 23	Ⅱ 44	Ⅲ 42
I 23	23-23	23-42	21-42
Ⅱ 44	44-23	(Ⅱ+Ⅱの一部：23-42)	
Ⅲ 42		44-42	

## B 型変調

前字 \ 後字	I 23	II 44	III 42
I 23	(I+濁平 : 21-34)	23-21	(無し)
II 44	44-42	(II+IIの一部 : 23-21)	
III 42	44-21		

A 型と B 型のそれぞれの変調を取る語彙やフレーズがどのような性質を持つかについてはわからない部分が多いが、動賓フレーズがほとんどが A 型を取ると言うことはできる。

[I+III]の組み合わせのほぼ全てに表れる 21-42 型は A 型に入れたが、B 型に入れてもよい。

A 型変調では、第一音節では第 I 声と第 II・第 III 声の区別が(II+IIの一部を除いて)保持される一方、第 II 声と第 III 声は区別が失われて 44 調になる。第二音節においても同様に、第 I 声は 23 調を保持するが第 II 声と第 III 声はどちらも 42 調となっている(但し、I+II と I+III は第一音節のピッチによって区別される)。但し、第一章に述べたとおり、臨夏方言には発話末位に下降調が現れ、第 II 声と第 III 声の調値の区別が覆い隠される特徴があることを踏まえると、第二音節の第 II 声と第 III 声の調値は実際には区別がある可能性がある。特に、後ろに「的」などの後置成分がついた場合に、両調の区別が顕現することは充分に考えられるが、今回の調査では残念ながら考えが及ばず、確認しなかった。

B 型変調は、基本的に、第二音節の調類が中和するタイプである点において、普通話などの軽声と似ている。

第二音節が第 III 声のものは一つの音調型に集中する傾向が著しい。[I+III]は 21-42 のみ、[II+III]は 44-42 のみで、[III+III]は 44-42(A 型)が圧倒的に多く 44-21(B 型)を取るものは少ない。単字調と同じ 42 調を保持しようとする強い傾向が見て取れる。

[II+II]の組み合わせについては、A 型、B 型ともに、[I+II]の組み合わせと一致する 23-42 及び 23-21 の調型が見られ、[上+上]→[陽+上]の変調の反映の可能性を示唆しておいたが(2.3.4)、普通話などとは異なって、[II+II]の組み合わせの全てが一律に[I+II]と同じ調型を取るわけではない。[II+II]の組み合わせが取る調型の最大勢力は、実は 44-42 であって、23-42 や 23-21 ではないのである。このことから、臨夏方言の[上+上]→[陽+上]変調はすでに生産性を失い、一部の二音節語の中に化石的に残ったものと考えられる。

B 型変調の[I+I]の組み合わせに現れる 21-34 の型は、主として第二音節が「濁平」の場合に現れ、中でも[清平+濁平]の組み合わせに多く現れる。

## 2.5. 接尾辞「-子」を伴う名詞の調型

### 2.5.1. 清平字+「-子」

44-42 : 釘子 篩子 身子 靴子 沙子 鞭子 金子

23-21 : 筐子



21-42 : 獅子

44-21 : 村子

#### 2.5.2. 濁平字+「-子」

21-42 : 繩子 茄子 蚊子 炉子 盘子 儿子 裙子 笼子

23-21 : 籃子

44-42 : 坛子

#### 2.5.3. 上声字+「-子」

44-42 : 剪子 領子 鎖子 毯子 掸子

44-21 : 管子

#### 2.5.4. 去声字+「-子」

44-21 : 豹子 罐子 筷子 袖子 褲子 扣子 扇子 帽子

#### 2.5.5. 入声字+「-子」

44-42 : 蝎子 尺子 抹子 袜子

44-21 : 日子 櫬子 虱子 碟子

23-21 : 勺子

21-42 : 竹子

2.5.6. 考察。接尾辞「-子」を伴う名詞の変調は、一般の二字句の連読変調とは異なるところがある。清平+「-子」(2.5.1)に多く現れる 44-42 は第一音節が第Ⅱ声(第Ⅰ声ではなく)である場合の B 型二字句変調に等しく、一方濁平+「-子」(2.5.2)に多く現れる 21-42 は[I + III]の二字句変調に等しい。「-子」の前の字の中古調類が清平であるか濁平であるかによって調型が異なることは、「-子」の添加によって陰平と陽平が識別できることを意味する。すでに見たように、一般の二字句の連読変調においては、[I +濁平]に 21-34 が多く現れる点を除くと、単字調におけると同様、陰平と陽平はすでに区別されない。「-子」を伴う名詞の変調のありさまは、臨夏方言にもかつては陰平と陽平の区別が存在したことを示すものであると理解される。一方で、上声字+「-子」(2.5.3)に多く現れる 44-42 は第一音節が第Ⅱ声である場合の B 型二字句変調に等しく、また去声字+「-子」(2.5.4)に現れる 44-21 は第一音節が第Ⅲ声である場合の B 型二字句変調に等しい。

入声字(2.5.5)は、44-42 と 44-21 の二つの勢力に分かれる形となった。前者は清平字+「-子」に多く現れる調型と同じであるから、入声字が平声(陰平)に派入した通時変化の反映と見ることができる。後者は去声字+「-子」に現れる調型と同じで、これらの字が去声に派入していることを示すものかもしれないが、字音調査をしていないため、詳しいことは不明である。

各調類に、例外的な調型を取る語が見られるが、“筐子”“籃子”“勺子”に 23-21 が見られるのを除き、全て他の調類の字に「-子」がついた場合に多く現れる調型と同じであり、単字調類が例外的であるなどの原因によるものと見ることができる。上掲の三語に見られる 23-21 は、第一音節が第Ⅰ声である場合の B 型二字句変調に等しい。

### 三、おわりに

河州話を取り巻くモンゴル諸語、チュルク諸語、チベット語などの諸言語はいずれも無声調言語である。河州話の単字調の数が少なく、その調値も不安定であることは、河州話が置かれている言語地理的環境と無関係ではあるまい。二字句の連読変調のうち B 型は、調値の問題のほかに強弱の問題も絡んでいる。普通話などの「軽声」とは異なり、第一音節が弱く第二音節が強い型(21-34 型)も見られる。

この調査のインフォーマントはかなり若いので、連読変調も臨夏古来のものとは若干異なるかもしれない。河州話の連読変調と強弱アクセントに関する先行研究には陳其光(1999)がある。本稿の記述と陳其光(1999)との比較検討は当然必要であるが、それは別稿に譲りたい。このほか、筆者が 2006 年に調査した循化方言の連読変調との比較や、東郷語に借用された漢語語彙が取るアクセントの型との関係など、筆者にはなすべきことが多いが、これも別の機会に改めて論じてみたい。

### 参考文献

- 陳其光(1999), 河州話的声調重音, 《中国語言學報》第 9 期: 249-265 頁。
- 程祥徽(1980), 青海口語語法散論, 《中国語文》1980/2: 142-149。
- 党志才等(2006), 《河州方言与普通话水平测试训练教程》(党志才、刘仁锋、雒鹏主编), 兰州大学出版社。
- 吉狄马加等(2010), 《青海花儿大典》(吉狄马加主编, 执行主编赵宗福), 青海人民出版社。
- 馬樹鈞(1982), 臨夏方言中的“名+哈”結構, 《中国語文》1982/1: 72-73。
- 蘭州大學中文系等(1996), 《臨夏方言》(蘭州大學中文系臨夏方言調查研究組、甘肅省臨夏州文聯編), 蘭州大學出版社, 1996 年 7 月。
- 張成材(1984), 青海省漢語方言的分区, 《方言》1984/3: 186-196 頁。
- 町田和彦等(2003), 『中国におけるアラビア文字文化の諸相』(町田和彦、黒岩高、菅原純共編)、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 更科慎一(2007), 中国甘肅省東郷県董嶺郷の東郷語, 『山口大学文学会志』第 57 卷、25-54 頁。
- Charles N. Li(1984), from Verb-medial analytic language to Verb-final synthetic language: a case of typological change, *Proceedings of the Tenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, Feb. 17-20, 1984, 307-323. Berkeley: Berkeley Linguistics Society, University of California.